

グラフで見る景気概況

【日本経済の景気概況】

景気回復の動きが減速して、一時的に弱含んでいる。12月の鉱工業生産は、前月比 - 0.1%とほぼ前月並みの推移となったが、四半期でみると10-12月期は前期比 - 0.9%と4四半期ぶりに減少に転じている。製造工業生産予測指数では、1月が+2.1%のあと2月が - 1.1%と一進一退の展開となることが見込まれており、生産は足踏み状態が続くそうである。

11月の機械受注（船舶・電力を除く民需）は前月比 - 0.2%とほぼ前月並みとなった。見通しでは10-12月期は前期比 - 6.5%の減少が見込まれているが、工作機械などの回復を背景に足元では見通しを上回る水準で推移している。

個人消費関連の指標を見てみると、12月の勤労者世帯実質消費支出は前年比 - 3.5%と、3ヶ月連続のマイナスとなった。乗用車販売はプラス幅が縮小傾向にあり、大型小売店販売（実質）はマイナスに転じている。雇用・所得環境の改善が遅れる一方で個人消費は堅調さを保っていたが、足元では弱含んできている。住宅着工戸数は、持家の低迷が続く中、分譲、貸家もマイナスとなり、全体で前年比 - 3.4%と2か月連続で前年比マイナスとなった。年率換算の着工戸数も、111.9万戸と低い水準での推移が続いている。

外需については、輸出は昨年夏場以降減速気味であったが、足元ではやや盛り返しており緩やかながらも回復基調が続いている。一方、低迷が続いていた輸入も足元で増加の動きが見られる。貿易黒字は今後、原油価格高騰や火力発電需要の増加により原油輸入の増加が予想され、縮小に向かう見込みである。

物価の動きをみると、素材価格は、需給調整とアジア向け輸出需要の好調を背景に上昇に転じている。石油製品価格は、原油価格上昇の影響が出てきている。ただし、機械類の下落幅縮小ペースが鈍化し、足元では為替円高が進展しており、物価押し下げ圧力は依然として強い。

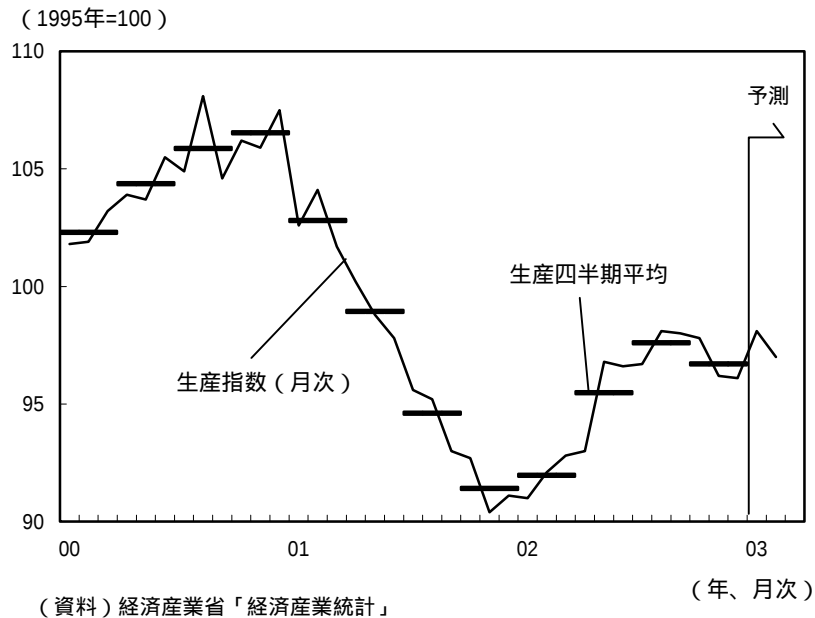


お問い合わせ先：調査部(東京)国内経済班 e-mail: ikedat@ufji.co.jp

日本の景気概況

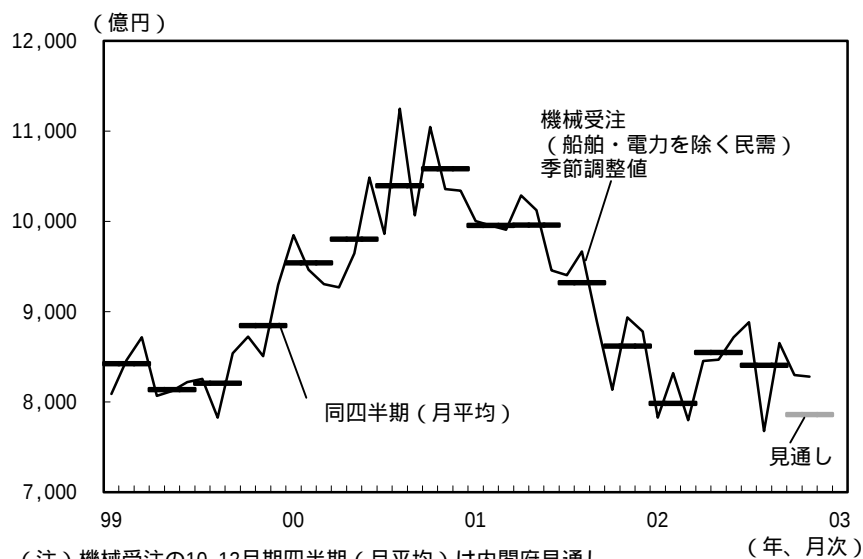
1. 生産

- ～ 12月の鉱工業生産は前月比 - 0.1%とほぼ前月並みで推移した。四半期でみると、10-12月期は前期比 - 0.9%と4四半期ぶりに減少に転じている。製造工業生産予測指数では、1月が+2.1%のあと2月が - 1.1%と一進一退の展開となることが見込まれており、生産は足踏み状態が続くそうである。



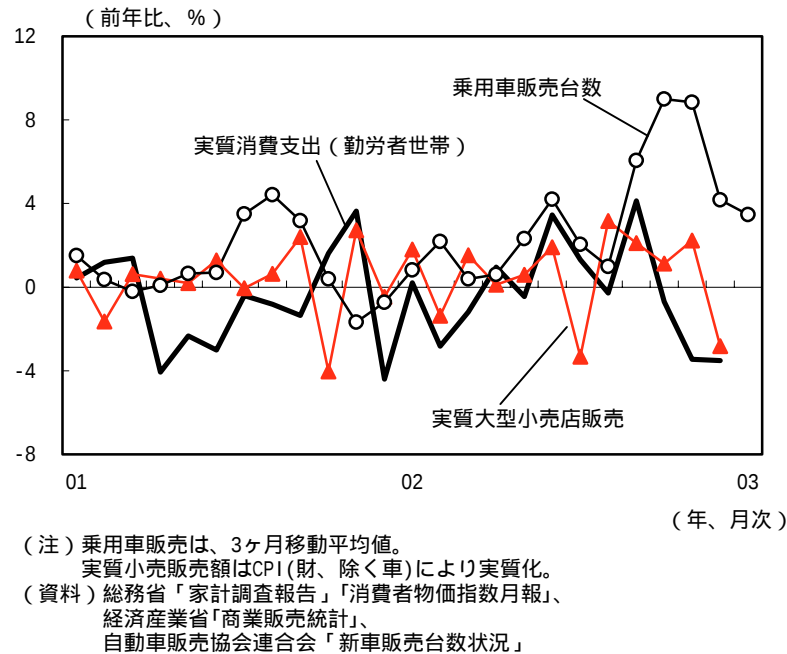
2. 設備投資

- ～ 11月の機械受注(船舶・電力を除く民需)は前月比 - 0.2%とほぼ前月並みとなった。見通しでは10-12月期は前期比 - 6.5%の減少が見込まれているが、工作機械などの回復を背景に足元では見通しを上回る水準で推移している。



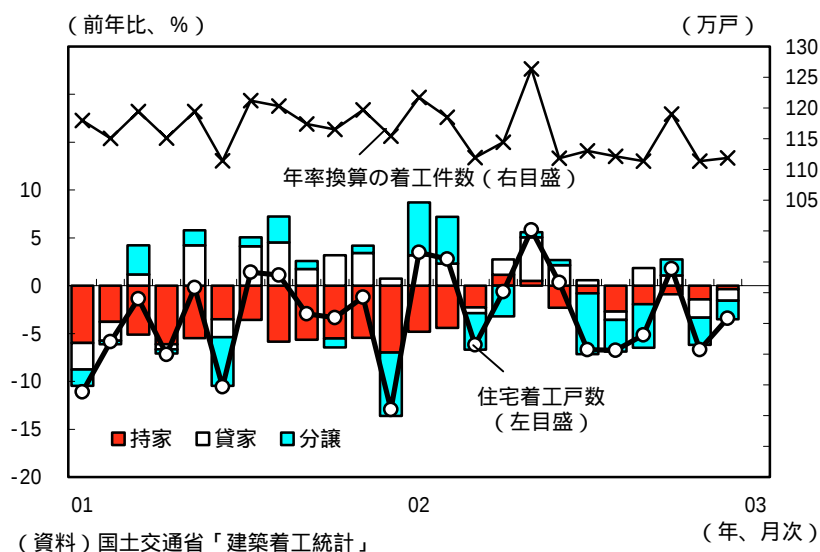
3．個人消費

- ～ 12月の勤労者世帯実質消費支出は前年比 - 3.5%と、3ヶ月連続のマイナスとなった。乗用車販売はプラス幅が縮小傾向にあり、大型小売店販売(実質)はマイナスに転じている。雇用・所得環境の改善が進まないなかでも堅調だった個人消費だが、足元では弱含んできている。



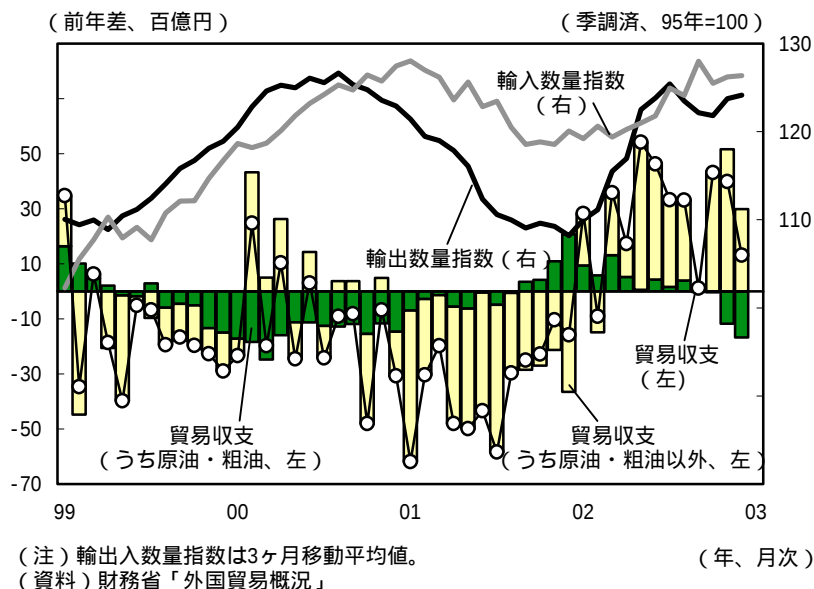
4．住宅

- ～ 12月の住宅着工戸数は、持家の低迷が続く中、分譲、貸家もマイナスとなり、全体で前年比 - 3.4%と2か月連続で前年比マイナスとなった。年率換算の着工戸数も、111.9万戸と低い水準での推移が続いている。



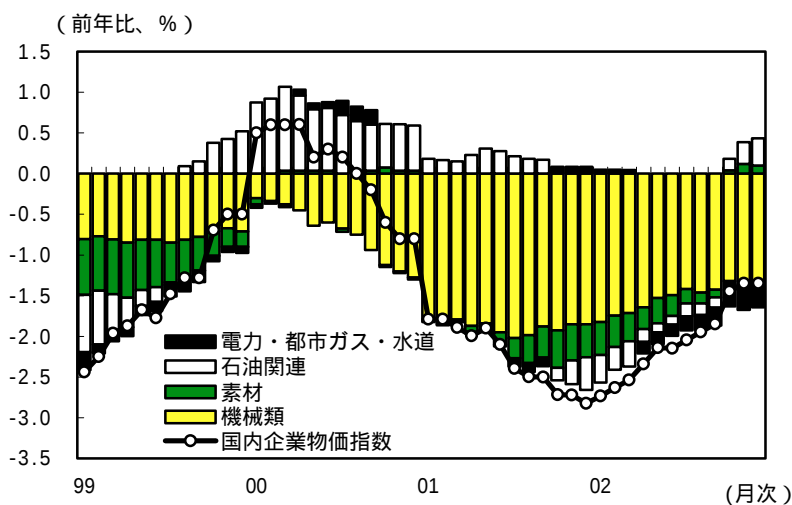
5．外需

- ～ 輸出は昨年夏場以降減速気味であったが、足元ではやや盛り返しており緩やかながらも回復基調が続いている。一方、低迷が続いていた輸入も足元で増加の動きが見られる。貿易黒字は今後、原油価格高騰や火力発電需要の増加により原油輸入の増加が予想され、縮小に向かう見込みである。



6．物価

- ～ 素材価格は、需給調整とアジア向け輸出需要の好調を背景に上昇に転じている。石油製品価格は、原油価格上昇の影響が出てきている。ただし、機械類の下落幅縮小ペースが鈍化し、足元では為替円高が進展しており、物価押し下げ圧力は依然として強い。



金利・為替動向

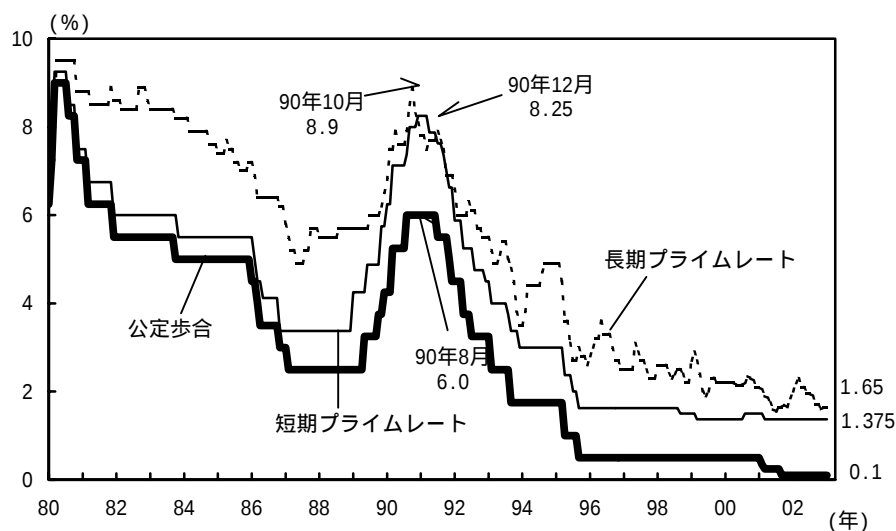
(注)足元の数値は、1月31日現在

長・短期プライムレート、公定歩合は月末値、それ以外は月中平均の数値を使用して作成

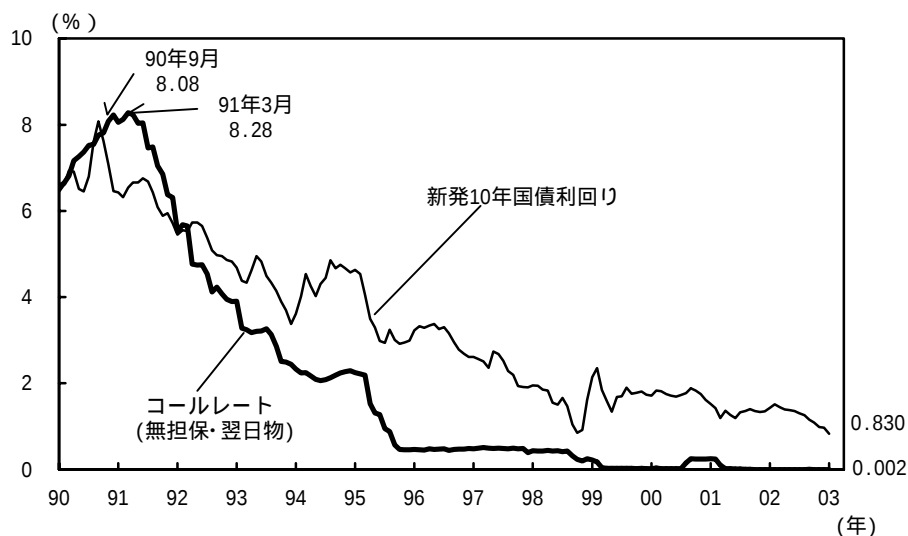
短期プライムレートは、都市銀行が自主的に決定した金利のうち、最も多くの数の銀行が採用した金利

○ 国内金利

- ～ 日銀は1月22日の金融政策決定会合で、当座預金残高の目標を「15-20兆円程度」に据え置いた。潤沢な資金供給の実施により、足元の当座預金残高は目標のほぼ上限で推移している。長期プライムレートは前月と変わらず、1.65%に据え置かれている。

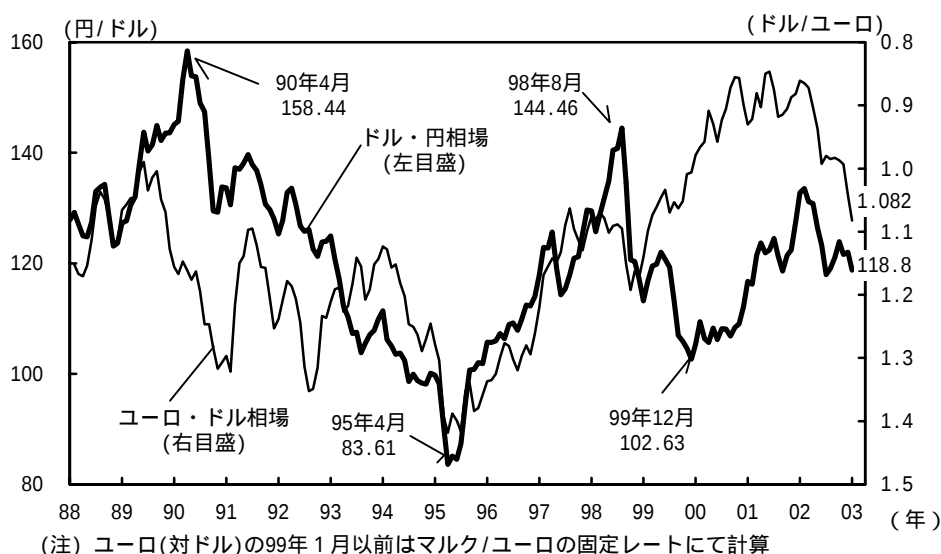


- ～ 無担保コール翌日物金利は日銀の潤沢な資金供給もあり0.002%前後で安定的に推移した。長期金利は、運用難から国債への資金流入の動きが続いたため一段と低下し、下旬にはこれまでの最低であった0.775%を下回って推移した。



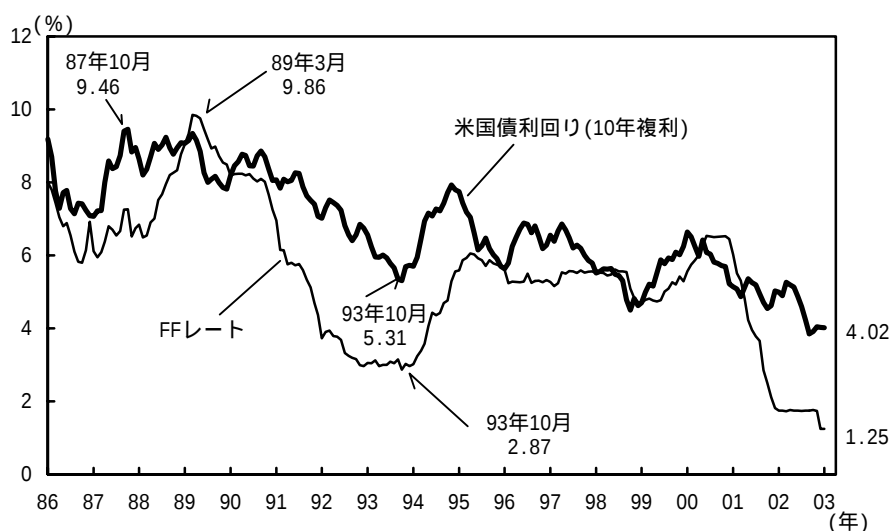
○ 為替相場

～ 上旬には1ドル = 120円前後で推移していたが、米国株価の軟調な動きを受けてドルが売られたことから、中旬以降は1ドル = 118円を下回る水準までドル安が進行した。



○ 米国金利

～ 米連邦準備制度理事会 (F R B) は、1月29日の連邦公開市場委員会 (F O M C) で F F レートの誘導目標水準を1.25%のまま据え置いた。長期金利は、昨年末には3.8%前後にまで低下していたが、1月にはやや上昇し、月中を通してほぼ4.0%近辺で推移した。



本レポートに掲載された意見・予測等は資料作成時点の判断であり、今後予告なしに変更されることがあります。